

頬に感じた、柑橘系の果実のような柔らかな感触に、意識が水の底から浮き上がるような感覚を覚える。

「……ト、ちゃん」

耳に聞こえるのは、雲の隙間から風によつて外界に届けられる天使の声。

「フェイト、ちゃん」

私の名前を呼ぶ声。大切な、大好きな人の声だ。

「フェイトちゃん、朝だよ」

鼻腔をくすぐるシトラスの香りと共に、また私の頬になにかが触れる。

ほんのりと湿った、温かな感触。

なのはの、唇の感触だ。

「フェイトちゃん」

もう一度。そろそろ目を開いてもいいのだけれど、その囁きかけるような声が愛おしくて、ずっとそれを聞いていたいと、つい意地悪をしてしまう。

「フェイトちゃんってば、もう」

肩になのはの手が触れる。

それだけで、全身になにか痺れるような感覚が走って、私はかすかに身悶えした。

「起きないと、またキスしちゃうよ？」

少しいたずらっぽいなのはの声から、その表情を思い浮かべる。

きつと、「しかたないなあ」という感じの苦笑いを浮かべて。

それから目を閉じて、ゆつくりと私の頬に口先を寄せて。

また、キス。

むずがるように、私は手足を折りたたんで縮こまる。

「フェイトちゃん」

キス。

「フェイトちゃん」

キス。

「フェイトちゃん」

キス。

「フェイトちゃん」

キス。

十七回繰り返したところで、私は寝返りを打つ振りをして、顔の向きを変えた。

今までと反対側の頬が、なのはの前にくるように。

「フェイトちゃん」

そこにまた、なのはのキス。

「フェイトちゃん」

十九。

「フェイトちゃん」

二十。

そうして三十四回目、私はまた体勢を変えて仰向けに

なった。

「フェイトちゃ……」

なのはが顔を近づけてきたところで、目を開ける。

そのまま左手を伸ばしてなのはを抱え込むように引きこ

むと、なのはの唇に自分の唇を重ねた。

「んっ……う」

舌先で、くすぐるようになのはの口もとを舐める。

「や、ん……」

なのはの口がわずかに開いたところを押し開けるように舌を入れる。

「んあ、ふ、ん」

なのはの舌に自分の舌を絡めて、なのはの唾液をすくいとるように。

「は、にや、あ、ふうっ」

なのはの重みが、自分の胸元にかかる。

身体から、少しずつ、力が抜けているんだろう。

そのまま舌でなのはの口内を愛撫しつつ、傾合いを見計らって、私は指でなのはのうなじのあたりを、す、と軽くなぞった。

「んああっー」

一瞬背中がびくん、とはねて、そのまま倒れこんできたなのはの身体を受け止める。

「おはよう、なのは」

「ん、おはよう、フェイトちゃん」

微笑みかける私に、やや息をはずませながらもなのはも笑顔で答えてくれる。

「なのは、立てる？」

「えと……ちよつと、ちから、はいらない、かな」

照れくさそうにうつむくなのはの髪をそつと梳きながら、私は身体を起こした。

「そっか、じゃあ」

ぐつたりと突つ伏したままなのはを横抱きにかかえあげつつ、ベッドを降りる。

「あ、フェイトちゃんあったかい」

「夕べは、なのはがずつとそばにいてくれたからね」

そのままなのはをダイニングにあるソファーまで運んで座らせると、私もその隣に腰を下ろして、うん、と一つ背中を伸ばした。

テーブルの上のリモコンを操作して、カーテンを開ける。

「お、今日はいいい天気だ」

テラスの向こうに広がる一面の青い空に、私は目を細めた。

「良かった。せつかくの休暇なのに、お天気悪いとなんとなく気が滅入るもんね」

私の肩に顔を寄せて、なのはが上目遣いに見上げてくる。そのわずかに潤んだ瞳に心が揺さぶられるのをなんとか

抑えこみつつ、私はなのはを抱きよせてうなずいた。

「えへへ。久しぶりに一緒のお休み、だね」

「そうだね。今日明日はのんびりしようか」

私の言葉に、しかしなのはは不満そうな顔で首を振る。

「えー、のんびりもいいけど、せっかくだからどこかにお出かけしたいなあ」

ああ、やっぱり。

なのはの反応は私の予想の通りだった。

そう言ってくれるのは嬉しい。嬉しいのだけだ。

ちらり、となのはを見る。

その目、その唇、その肌から、なのはのわずかな疲労が見て取れて、私は心のなかで溜息をつくのだった。

あれは、一週間ほど前のこと。

「それじゃあね、フエイトちゃん」

「うん、なのは。また夕方」

その日は二人とも朝から仕事で、私はなのはと一緒に管理局までやってきて、門のところまで別れた。

教導隊の隊舎へと向かうなのはの背中を見えなくなるまで見送って、執務室に向かう。

ようやく届いた執務官になりたいという夢だけど、本当に大切なのはこれから先だ。

まだまだ駆け出しも駆け出しのひよっこ執務官だけど、

やらないといけないことはたくさんある。

管理局の執務官としての自分と、地球での中学生としての自分。両立させるのは大変だけど、どちらも自分が望んで選んだ道だ。弱音を吐いてはいられなかった。

幸い、今は学校は夏休み。仕事に集中できるこの期間に、とにかく出来ることは全てやっておきたい。

一つでも多くの悲しみを救えるように、今の自分に可能な最大限のことを。

そう、私のことはそれでいい。

それよりも、気になるのはなのはのほうだ。

今朝は、昨日よりも少しだけ肌の色がくすんでいた。腫の光もかすかに濁っていて、きつと疲れているんだと思う。

たしかに昨日の教導内容だと、なのは自身もきつとそれなりに動かないといけなかっただろう。

もしかししたら、私の見ていないところでまた無理をしたんじゃないだろうか。

「とりあえず、今日帰ったらなのはによく言っておかないと」

執務官室に入ると、私はさっそく端末を立ち上げて、なのはの今日の教導予定、今週の予定、来週と今月の予定を確認した。

今日は講義中心だし問題はないだろう。身体に負荷が